

再生氾濫原アザメの瀬における社会連携事業の実施と住民評価

九州大学 21 世紀プログラム課程

学生会員

中山 希未

九州大学大学院工学研究院

正会員

林 博徳

九州大学大学院工学研究院

フェロー会員

島谷 幸宏

1. 背景

大学をとりまく環境の変化により、社会貢献を地域と連携して行うことの重要性が指摘されつつある。大学と地域の連携に関する既往研究¹⁾では、地学連携の活動を（i）大学法人主導型（ii）大学教員主導型（iii）学生主導型（iv）ガバナンス型の4つに分類している。特に（iv）ガバナンス型は教員や職員の牽引の結果、ネットワークができ、組織全体を上げてネットワークを組む形態であるため、目標とする形態とされる。ガバナンス型の地学連携に関する事例報告は多数なされているが、対象者の評価を得た事例はほとんどない。

2. 本報の目的

本報では九州大学で実施されている地学連携活動（社会連携事業という）で、アザメの瀬における実践を行い、住民からの評価を得る。地学連携類型のガバナンス型の取り組みの住民評価の事例蓄積を目的とする。なお住民から本事業への評価を得るためにアンケート調査（集合調査方法）を行った。対象者は検討会に参加している地域住民と、NPO 法人アザメの会の会員、アザメの瀬の活動に関わったことのある婦人会の会員である。

3. 調査対象事業

調査対象とした社会連携事業は「再生氾濫原アザメの瀬における地域活性化計画」である。アザメの瀬とは、佐賀県松浦川中流域に位置する国土交通省の自然再生事業によって整備された氾濫原湿地である。このアザメの瀬は、貯留池としての働きに加え、人と自然の触れ合いの場になっている。アザメの瀬は、徹底した住民参加による計画立案・実施をおこなってきたことが特徴的である。初期段階は多くの地域住民が検討会や活動に参加していたが、現在では参加者の減少や高齢化が進み、地域住民のアザメの瀬に対する関心が薄れていることが問題視されて

いる。

4. 社会連携事業の狙い

本事業は平成 22 年度より開始され、今年度で 3 年を迎えている。アザメの瀬における事業の狙いは以下の通りである。

4.1 図鑑による価値の共有化

アザメの瀬は多様な生物が生息する場としての価値が高いが、子供を含めた周辺住民はその価値を十分に認識していなかった。アンケートにおいても大学と地元のアザメの瀬に対する価値意識の差を指摘している意見が見られるように、地域に全国的なレベルで価値があることを共有する必要がある。そのツールとしてアザメの瀬の生物図鑑を作成した。

4.2 環境学習による活動の広域化

夏休みにアザメの瀬を用いた環境学習が平成 20 年より継続的に行われているが、開始当初参加者は地域の子供に限定されていた。子供向け雑誌、福岡市等周辺自治体への告知を通して、環境学習への参加者を地元以外に広げ、上記①の目的と同様、アザメの瀬の価値を地域の方に知っていただくきっかけとする。

4.3 ものづくりを通じた活動の活性化

検討会にてアザメの瀬学習センターに雨水タンク、棚、ハス田を作成することが決まった。その際に計画や業者委託など、地域住民が主体的に活動を行った。

4.4 女性との連携強化

地域におけるアザメの瀬の活動参加者は男性が多く、女性の参加者が少ない。女性の地域住民にもアザメの瀬について興味を持ってもらうために、地域の婦人会に、アザメの瀬において風景写真を定期的に撮影してもらう業務を委託した。また、魅力的なものや運営形態について、女性のみで話合う女性集会を開催した。

5.結果

5.1 図鑑の評価

図鑑には、魚類・昆虫を中心とした生態写真が多数掲載されており、地域住民の方にも好評であった。住民より「アザメの瀬の魅力を再確認することができた。」などの感想が聞かれ、評判も上々である。さらに、生態学会や他地域シンポジウムにおいて当図鑑を配布することで、対外的な広報の効果も得られた。

5.2 環境学習の評価

今年度は4歳から11歳までの29名の子供が参加した。アザメの瀬周辺（相知町）に住む児童よりも福岡県や佐賀県内の相知町外の地域からの参加する児童の方が多かった。アザメの瀬に対して興味を持っている他地域の人が増加している結果であるといえる。

5.3 ものづくりの評価

ものづくりに関する話し合いでは活発に意見交換が行われた。地域住民が主体的に活動を行うようになり、設備の充実と活動の活性化につながった。また、この活発な活動が国交省へも波及し、雨水タンクは国の予算により設置できることになった。

5.4 女性との連携の評価

女性にアザメの瀬での仕事を委託することによって、アザメの瀬の活動に興味を示す人が増えた。また、女性集会は検討会に比べ意見をしやすいという意見が多く、活発に意見交換ができ女性の意見を活動自体にも反映できた。

5.5 総合評価

5.5.1 アンケート対象者

アンケートは、計21名からの回答を得た。属性を表1に示す。

表1 アンケート回答者の属性

年齢	性別	住まい	
60代	57% 男性	76% 佐里地区	95%
70代	24% 女性	24% 杉野地区	5%
50代	14%		
40代	5%		
N=21			

5.5.2 社会連携事業に関する評価

アンケートでは、「九州大学がアザメの瀬に関わって良かったと思うか? (選択式)」、「良かったと回答した場合、その理由 (選択式、複数回答可)」について回答を求めた。図1および図2にアンケートの結果を示す。

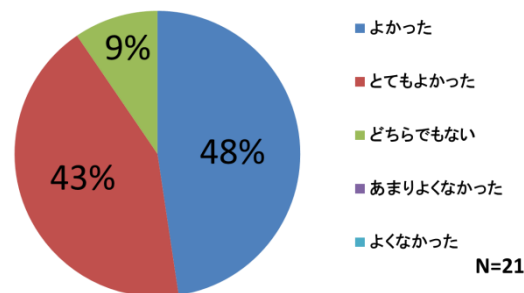


図1 大学がアザメの瀬に関わってよかったか

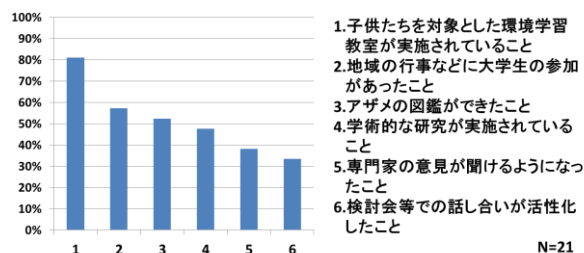


図2 大学が関わってよかった点

図1より、計91%の被験者が、大学がアザメの瀬に関わってよかったと回答していることから、本事業は地域住民から一定の評価を得ていることが分かる。図2では、大学が関与してよかった点について、80%以上の被験者が環境学習の実施について挙げていることから、子供を巻き込んだ活動が重要であることが分かる。学術研究の実施についても50%近くの被験者がよかった点として回答していることから、大学のアカデミックな機能を果たしている点の評価していることが分かる。また、50%以上の人が地域の行事に大学生が参加していることをよかった点としてあげていることから、学生が地域の取組みに参加することが地域住民から評価されていることが分かる。

6. 今後の課題

九州大学の改善すべき課題は、研究内容を地域へ報告すると同時に調査日告知や勉強会開催するなどアザメの瀬の価値を伝えていく活動をしていくことである。アザメの瀬の活動においては、小中学生向けのイベントを開催し、興味を持つ次世代の育成をしていくべきである。

7.参考文献

- 1) 杉岡秀紀「大学と地域との地学連携によるまちづくりの一考察」同志社政策科学研究 9 (1) pp.77-96